

たぬき道 TANUKI-Michi

MAY 1993
ISSUE NO.0

タヌキ倶楽部 THE RACCOON DOG INFORMATION NETWORK

◆◆◆◆◆目次◆◆◆◆◆

I. タヌキクラブ 発足に向けて	佐伯 緑
II. 地域ニュース「民芸品に見る淡路島のタヌキ」	うづ志ほ名産店より
III. エッセイ「たぬき山のアオダイショウ」	瀬川 也寸子
IV. タヌキ文献目録(Tanukiological Abstracts)について	佐伯 緑
V. 簡単なタヌキのはかり方 (1)「体測」	佐伯 緑
VI. 文献紹介	福江 佑子
VII. 掲示板(BULLETIN BOARD)	
VIII. アンケート及び申込書	



タヌキクラブ 発足に向けて 佐伯 緑

タヌキはその日本国内での広い分布からあちらこちらで観察されたり、地域レベルで研究されたり、また交通事故や病気などで保護されたり死体を回収されたりする機会も近年増えているようである。しかし、狩猟獣でありながらその個体群の調査研究はあまりなされておらず、世界的にもその生態についてまだまだ知られざる動物としての印象がある。例えばタヌキは順応性に富んでいると言われ、人里離れた低山の尾根道にタメフンを見ることがあれば都心近郊の住宅地を住处としたりもする。しかしその生態をどこにでも住み何でも食べると片づけてしまって良いだろうか。それとも特定地域の数個体における行動や食性をタヌキ一般の生態として良いだろうか。個体群増加傾向にあるときの繁殖率は？安定期の死亡率は？配偶者はどうやって選ぶ？隣接個体やグループとの繋がり？基礎新陳代謝量は？ホンダタヌキとエゾタヌキと遺伝子でどう違う？年間合法捕獲数は？年齢構成は？タヌキ寝入りの生理学的メカニズムは？等々。分からないこと知りたいことが山ほどあるのは私だけではないと思う。知識情報を持ち寄り疑問をぶつけ合う仲間を増やしたい、それがこのネットワーク作りの根底にある動機である。

このような粗大な気持ちでネットワーク作りをタヌキに関して先輩であり友人でもある福江佑子さんと瀬川也寸子さんに相談したところ幸いにも賛同を得て、まずは3人の知人

知己を中心にタヌキに興味のありそうな人々にこのニューズレター零号を発送し賛同者を募ることにした。勿論タヌキに限らず野生生物に興味がある人や、よく野外に出て感覚や思考を働かせる(遊ばせる)人なら誰でも違和感なくとけ込めるものにした。

目的は「タヌキに興味のある人々を繋ぐネットワークを作ることによって、タヌキ及びその関連事項の知識情報を蓄積し、問題提起や討論を活発にし、また色々な所での活動や情報を紹介し、タヌキ研究の発展に尽くす」こととし、活動は1)ニューズレターの発行、2)タヌキ文献要約集の作成、及び3)会員名簿の作成を考えている。1)については情報交換、意見交換、問題提起等の会員参加の場として年四回発行し、地域ニュース、エッセイ、文献紹介、マンガ、掲示板等から構成され、会員に積極的に執筆してもらう。2)はこのニューズレターのIVで詳しくその構想を述べた。3)は会員間の交流を高めるためある程度会員が集まれば作成し、興味や専門分野も載せる。以上が現段階での案である。仮称は『タヌキクラブ』英名 "Raccoon Dog Information Network" であるがもっと斬新な名称があればどしどし提案して欲しい。現段階では、年会費としてニューズレター購読のみで800円、ニューズレター、目録、名簿で2000円を予定している。

このニューズレターの最後にアンケート及び同意書(入会申込書)があります。賛同・不賛同に関わらず、活動内容についてやその他何でもご意見を承りたく思います。宜しくお願い申し上げます。

しばえもん狸のいわれ

淡路島三熊山の柴右衛門狸は、尾島の太三郎狸、佐渡二つ岩の團三郎狸とならび日本三名狸の一つである。

生れは淡路の洲本在、月の三熊の山育ち、生れついで芝居好き、人のうわさにたまりかお、まんまと化けた武家姿、あとは白浪白河の夜舟で渡る通い舟、着いたところは千成の花のなにわの芝居茶屋、しらほり酒の酔い心地、角座にかゝる熊谷の陣屋にみとれうらかりと、我を忘れたその時に犬めに尻尾を押えられ見破られしは一期の不覚、見物業に捕えられ丁々発止と打ちすえられ、あたら命は落せど、はがれた化けの変らぬは、故郷の人の厚情、今ちま丸茶屋の前、祠に残るその名さえ、柴右衛門狸なアおいらのことさ。



たぬき山のアオダイショウ

瀬川 也寸子

七月のある日、私はその日もいつものようにタヌキの痕跡を探しに雑木林に入っていた。しばらく歩いているとどこからともなく視線を感じた。ふっと顔を上げると木の上から二つの目がじっとこちらを見ている。アオダイショウだ。それも大きいゆうに1メートルは越えている。

それにしても林の中で見る姿は実に美しく、背中を通るスジ模様もはっきりしており、木々の緑に冴える。私は思わず見とれてしまった。地上から2メートル位の枝の上に体を優雅に横たえていた。どうも私が昼寝のじままをしてしまったようなのだ。しかし、怒った様子はなく、穏やかな目をこちらに向けていた。こんなにリラックスしたヘビの姿は今までに見たことがなかった。

考えてみると私自身ヘビといえればアスファルトでぐたっと日向ぼっこをしている姿か、林道で出会うとそそくさとあわてて茂みに逃げ込む姿、また、畦道でカエルを丸呑みにしている不気味な姿しか出会ったことがなかったのだ。なぜかヘビ嫌いの人が多いが、この姿を一目見ればヘビも自然の一部であり、美しいと思うのではないだろうか。

しばらくして我に帰り、タヌキのことを思った時、この美談もひっくり返ってしまった。何かの本でタヌキの子がこのアオダイショウを嬉しそうにくわえている姿が載っていたのを思い出してしまったのだ。タヌキの立場で考えてみると、今まで美しかったヘビもご馳走に見えてくるから不思議なものだ。(断っ

ておくが、決して私はタヌキの様にヘビをくわえたことはない。)

とにもかくにも自然はすばらしい。そして限りなくおもしろい。自然はタヌキとの関わりを通して私に色々な感動を与えてくれる。

TANUKIOLOGICAL ABSTRACTSについて

佐伯 緑

日本のおとぎ話にはよく登場するタヌキについて書かれたものは多いようで少ない。この捕らえどころの無い動物を人は持て余したかのようである。特に科学的文献は少ない。これはこの動物の本来の分布がアジア東部に限られていたことと関係がありそうだし、一属一種で世界的に見れば珍しい類の動物になることもその一因であろう。また野生生物学の先進国を分布に含んでいたなら今までになんとか基礎データの蓄積はなされていたであろう。同じ犬科のキツネを考えてもその差は歴然である。確かにタヌキの研究は遅れている。その殆どの分野で先駆的な仕事が行われたに過ぎない。まして一般には、野生のタヌキがその生態、生理、系統などにおいて未知な部分の多い動物であることさえ認識されていないのが現状ではあるまいか。

そこで効率よくタヌキの理解を深めるにはタヌキについて何が研究されていて何が分かっているのか、またタヌキとはどのように理解・解釈されているのかを知ることが大切である。つまり少ないとは言いながら多岐に亘

る文献の数々を整理しまとめれば、タヌキの現時点での全体像が浮かび上がるのではないだろうか。そしてそこから新たにタヌキの真の姿を追求する戦略が生まれましょう。またタヌキについて知りたい分野やデータを拾い出すことも文献が整理してあればやり易い。そこで私はTANUKIOLOGICAL ABSTRACTSつまりタヌキに関する文献の要約集を作りたい。

現在私の手元に新聞記事を除いて53の文献がありその他77の出典が判明している。学術論文から絵本まで多種多様な媒体で、内容も様々な分野にわたっている。提案として分野は生態・生理・系統・社会科学・その他に分類し次の様にまとめる。

生態(ECOLOGICAL)=生態学(ECOLOGY)・行動学

(ETHOLOGY)・社会生物学(SOCIOBIOLOGY)・

博物学(NATURAL HISTORY)・分布(RANGE)

生理(PHYSIOLOGICAL)=生理学(PHYSIOLOGY)・

病理学(PATHOLOGY)

系統(PHENOLOGICAL)=系統学(PHENOLOGY)・遺

伝学(GENETICS)・形態学(MORPHOLOGY)・

解剖学(ANATOMY)

社会科学(SOCIAL SCIENCE)=歴史(HISTORY)・

風俗民話(MANNAR&FOLKTALE)・行政政策

(ADMINISTRATION&POLICY)

その他(OTHERS)

媒体は学術論文、学位論文、卒業論文、報告書、学会発表概要、書籍、雑誌記事、写真集、絵本、新聞記事、映像などが考えられる。

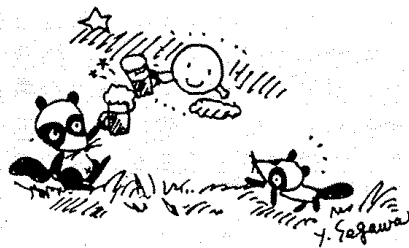
原案としては著者または編者名、発表年度、題、出典を明記し内容の簡単な説明または要約を載せる。それから前出の分類とキーワードをつける。索引は著者とキーワードで引けるようにする。最終的には全てに邦文と英文の両方を備えることを考えているが、まずは原文の言語で題と要約は表し、著者名のアルファベット順で載せる。

このように文献を体制化すれば研究者・著者のオリジナリティが確保され、引用する際にも正確さが得られるであろう。

埋もれている個人的なデータや手に入れ難い文献や地方の新聞記事などその所有者の協力で加えていくことによって、この文献目録は随時成長することが望まれる。また事務局にできるだけ多く文献を揃え、将来は会員の希望により実費で文献のコピーサービスも可能にしたい。つまりニューズレターだけでなく文献目録も会員間のフィードバックの材料としてネットワークを広く強くしていきたい。

以上が私が考えているタヌキ文献要約集、TANUKIOLOGICAL ABSTRACTSである。タヌキだから可能であるといえよう。例えばシカだったら文献が多すぎて收拾が付かないであろうから。(シカでも著者と題だけならあることはあるが。)

皆様からのご意見ご助言お待ちしております。



簡単なタヌキのはかり方 (1)「体測」

佐伯 緑

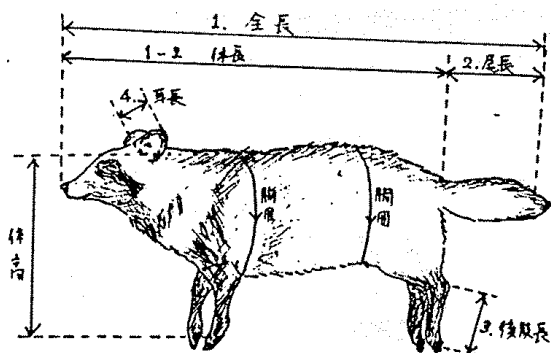
まずは外部計測から。最低取っておきたいのは全長(TOTAL LENGTH)、尾長(TAIL LENGTH)、後肢長(LENGTH OF HIND FOOT)、耳長(HEIGHT OF EAR)で、図のように死体または麻酔のかかった個体を平らな所に置いてミリ単位で測る。体長(HEAD AND BODY LENGTH)は全長から尾長を引いて算出する。尾長は尾の骨の先までで毛は入れない。後肢長は爪を除く。

それから胸囲(CHEST)は前肢の付け根で、胴囲(GIRTH)は後肢の前で測り、体高(HEIGHT)は肩甲骨の最上部から前肢をまっすぐ下ろして趾球までとする。

発信機などを首輪で装着する時に大事な計測は、首回り(NECK)と頭回り(HEAD)で、首輪の内径が頭回りと首回りの間であることを確かめる。(勿論、数字だけでなく首輪に指が二、三本入るかやってみる。)

その他、オスならば陰茎骨長(PENIS BONE)やこう丸サイズ(TESTICLE)、メスならば乳首長(TEAT)を測っておくのも生殖状況を知る手がかりになる。また、犬歯長(CANINE)を測って大まかな齢査定(若いかな寄りだとしか言えないが)の手引きにしてもよい。

次回は頭骨の計測。



==== 文献紹介 =====

『海を渡ったタヌキたち』

加藤輝治著 農山漁村文化協会 1992年

「アメリカ、中国との貿易が火をつけた毛皮ブームから、タヌキの災難ははじまりました。戦争の中国大陸で兵隊の防寒服や防寒帽となったこと、やっと終戦になったのに、腹をすかした人間に血眼になって追いかけられたり、大橋ができて本土と地つづきになったとたん、野犬がどっと入ってきたり、そして、人間がすくいの神と信じてすがった農薬…、タヌキはよくよく災難にとりつかれやすいけものなのではないでしょうか。」(本文より)

この話は瀬戸内海に浮かぶ小島、蓬萊島が舞台である。主人公、升吉を中心とする島民とそして先祖の頃より一緒に島に住んでいるギャコ(タヌキ)の姿を描いた物語である。

升吉の少年時代、ギャコは仲間だった。そして升吉が戦争に駆り出された時、同時にタヌキたちもその毛皮を剥され、兵隊たちの防寒服となり、「御国の御為」として海を渡ったのだった。

かつて島には2万頭と推定されたタヌキであったが、戦争によるタヌキ狩り、野犬や農薬によって200頭にまで減ってしまう。島のタヌキの減少を目の当たりにした升吉はこう思う。「みな人間がしかけたことばかりじゃ」と。

この蓬萊島でのできごとは、過去から現在にかけて、日本のあちらこちらで起こったできごとでもある。

戦争は人間のおかす行為だが、その被害は人間はもとより、タヌキをはじめとする野生動物に影響を与える。さらに自然、生態系まで壊しかねない。戦争だけではない。現代社会では、野生動物の交通事故の増加、伝染病の蔓延、野生化した家畜の野生動物への悪影響など人為的な影響による被害が広がっている。

本書は子供向けに書かれているが、大人の我々が、戦争による野生動物への被害、そして改めて、今後の野生動物との付き合い方について考えさせられる一冊である。

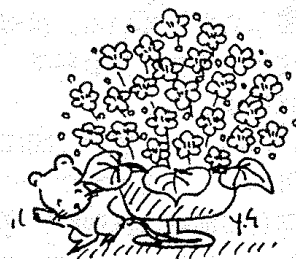
(文責 福江佑子)



本欄では皆様からの伝言や催し物の紹介及び宣伝、捜し物などの掲載依頼をお待ちしています。

タヌキクラブでは、ニューズレターの原稿やイラストなどを随時募集しています。

タヌキクラブでは、タヌキに関する資料を集めています。埋もれた文献、新聞記事、珍しい本や写真などについてお知らせ下さい。



近況報告

先日、犬(紀州犬♂1オ)を連れて大阪の能勢でキャンプを張りました。タメワンでも見つけてくれないかと森の中をうろつきまわりました。はじめ、ネズミの穴に鼻を突っ込んだり、トゲを突きかきまわっていた彼も、最後には私をタヌキの所へ引っぱってきてくれました。音も臭いも私には全くしけいのに彼はコーンしてぐいぐい行きます。タヌキの尻尾が土手上がりのが見えました。ヒトには計り知れないワンの能力です。㊦

著者紹介

佐伯 緑 (SAEKI, MIDORI) = 大阪産。米国メイン大学において野生生物管理学(WILDLIFE MANAGEMENT)で修士取得。英国オックスフォード大学の野生生物保護研究ユニット所属。
瀬川 也寸子 (SEGAWA, YASUKO) = 絵本作家。森林総合研究所関西支所でも働き、タヌキの研究を続ける。日本動物植物専門学院卒。論文に「八瀬の餌場でのタヌキの家族関係と子育て期の雌親の行動圏ほかについて」。
福江 佑子 (FUKUE, YUKO) = 金沢大学において修士取得。修士論文「金沢大学構内におけるホンダタヌキの行動圏利用パターンとPARENTAL CARE」ほか。東京農工大学博士課程。

仮事務局

〒567 大阪府茨木市南春日丘二丁目6の22
佐伯方
TEL 0726(25)9354 FAX 0726(76)0680